

後半 パネルディスカッション

山本：後半はですね、パネルディスカッションとして、まず全体を佐藤先生にまとめていただきながら、コーディネートしていただきながら進めて行きたいと思います。時間ですが、16時30分に終了予定ですのでご協力お願いします。それでは佐藤さんお願いします。

佐藤：短いプレゼンで一巡しましたので、少し後半の討議はテーマを焦点化していくということ、最後には、今若者支援の現場から、あるいはそれを総括的に考えた場合に、今どういう課題が見えてきているのか、その課題に対してどういう政策的な課題の提言を含めた、今後の支援の有り様を、構想していかなければならないのか。その辺りを参加者の皆さんと最終的には、若者支援のテーマとは何なのか、という議論をしてきたいと思います。

1時間少しだけ時間がございますので、はじめにレポーターのなかで言い足りなかったこと、あるいはレポーター同士のなかで、質疑、深めていきたいことなど、それぞれ三方の、僕も含めて四方の、話を聞いたうえで進めたいと思います。谷口さんからお願いします。

谷口：先ほどは短い時間で早口だったと思いますが、佐賀での取り組みを紹介させていただいた訳ですが、あの仕組みというのは、まだまだ未完成だと僕は思っています。支援体制の拡充という点ではかなり以前に比べれば、積極的に行政のほうも取り組んでいただいて、かなり理想的な方向に進んでいるものの、実際、次の段階としてどうかというと、やはり困難を抱えている子ども・若者が県全体で減っていくという段階までもっていかないと嘘だろう、と考えています。実際に、佐賀市、我々が拠点をおいている所は、実は不登校数は減ってきました。他の地域に比べて、目に見える数字というものが出てきている訳ですが、実際にそれが就労段階のところまで見ていくと、その事情は変わってくる。やはり雇用は受け皿の限界があって、佐賀県も依然として厳しい状況が続いている。そういったなかで、どうやっているかということ、県外まで就職活動を広げるしかないため、地域ではなく県外に若者が流出していつている。こ

ういった実情があります。こういった観点も含めて実際にこのディスカッションの中で今後の受け皿を含めた方針を協議できたらな、というふうに思います。

南出:谷口さん、Akiiさんの報告で気になった点について今後どうするべきか、ということで、若者支援機関の充実ということもさることながら、従来型機関、若者支援にも関わる従来の機関自身がやせほそっている状況をなんとかしていかなければいけないと思いました。具体的に言えば、谷口さんが言っていた、いろんな機関からどんどん困難なケースばかりが谷口さんのところに持ち込まれて、ケースばかりが膨らんでくる。でもその中には本来、保健所なり、児童相談所などがやってしかるケースもかなり含まれているのではないかと。それぞれの機関が人も減らされているし、苦い状況できちんと支援をできずにいるために、若者支援にそのヘルプが期待されるのではないかと。若者支援が総体として大事にしている寄り添い型支援っていうのも、若者支援だけやるんじゃなくて、児童相談所での寄り添い支援もあっていいし、ハローワークでの寄り添い支援もあっていいし、あってしかるべきだと思う。そういう全体でやっていく方向性を一緒に作っていかないと、結局難しいケースの外部委託・丸投げになってしまう、トータルで見ているところにしわ寄せがきて、スタッフ・支援機関そのものが、疲弊していく状態になってしまうんじゃないかと思いました。

同じような観点ですが、Akiiさんの言葉で一番気になったのが“学校よりコミュニティ”という部分。学校のあり方が一方的になっている現状があるからだと思うのですが、対立的に捉えてしまうだけでなく、“コミュニティとしての学校”とか“生活の場としての学校”とか、そういう部分は学校の機能として本来重要な位置づけになっているし、なりうる可能性はあるはずなんですよね。だけど、学校の現実をみると、そんな実践は端に置かれているのも事実で、これはちょっと危ういなど。だから学校外の現場で頑張るだけじゃなくて、学校そのものももう少しなんとかしていく、こういう協働がまた必要になってくるのではないかと思いました。

特に学校や企業との協働によって、排除された若者たちの支援だけでなく、排除されてない、枠の中で競争させられ苦しんでいる若者たちも支援していくことができることとなります。学校には行っている・仕事はしているけれ

ど苦しいといった若者たちと、そういう場に入れずに苦しいという若者たちとで、その苦しきで共闘していける回路づくりが今後は大事になってくるのではないかと思います。仕事をしている人、していない人という対立ではなくて、どちらもなんか苦しめられて、異常な“ふつうさ”に追い立てられているわけだから、仕事に就いている、就いていない関わらず、生きやすい社会を作っていく、そういう共闘の広がりを見据えていく必要があると思いました。

佐藤：Akiiさんに行く前に、深めながらまわしていきたいのですが、谷口さんのところの佐賀の取り組みのなかで、おそらく子ども・若者育成支援のなかで出てきた中核的な役割を、佐賀県のなかで果たされていると思います。その協議会、あるいは連携といったところでの問題点、あるいはどういう風に工夫することで、動くことで、そこでいわゆる支援が独りよがりにならないためには、さまざまな専門性の連携がとても重要になってくると思うのですが、これがなかなか今まで難しく、縦割り行政の問題などで阻まれて、それはいろいろところで問われるけれど、上手く進んでこなかった。それが佐賀県で、進んでいるとしたら、どういう工夫やどういう取り組みのなかで生まれてきたのか、そのなかでまだ残っている課題など、触れていただきたいと思います。

谷口：はい。実はそのやはりこれまで縦割りだったところを突破するというのは簡単ではなくて、1つの方法論で突破できるものでもない、訪問支援同様に、多面的にアプローチしていくということがまさに求められていると思っています。その大枠での話になりますが、1番効果的だったものをあげるとするならば、やはりアウトリーチです。実はハローワークにしろ、学校現場にしろ、保健福祉機関にしろ、ひきこもっている若者たちへ適切にアプローチすることはなかなか出来なかったわけです。また、実際に相談に来ることができた若者に対しても、支援しても結果がでない場合も少なくない。実はそれは表面的な行動に対するアプローチであって、それを発症させている背景要因、仮に家庭に原因があるケースの場合でも家族問題を一緒に解決する、こういった観点で十分ではないか、もしくはできなかった。こういった現状から関係機関の間でも直接的にアプローチする手段としてアウトリーチの必要性が生じてい

た。その支援手段をコーディネーターとして機能する指定支援機関である我々が持っていたから縦割りを突破できたのではないかと思います。実際の連携の際には、我々が家庭のなかに入って行って当事者と関係性を作って、本来相談室対応では把握できない背景要因等の情報を得ることによって問題解決を図ると共に、さらには当事者が関係機関に伝えきれない状態や状況等を我々が代弁することによって関係機関が持つ専門性を十分に発揮していただける環境を作り、継続的にフォローします。こういったことが出来たからこそ、回り始めたということなんだろうと思います。

佐藤：子ども・若者協議会の制度設計のなかに、今まで行政によるそのようなワンストップの総合化した的な支援は無理だと、縦割りで、だったら民間にやらせなくちゃいけないという発想があるんですよ、そもそも。ところが、従来の公的な機関は民間に何ができるか、と思っているんですよ。そこでそもそも設計が成立していない。だから佐賀の場合は、これは特異な例だと思いますよ。全国でやられているなかのほんの一部分の例で、それを突破できないのです。じゃあその、民間に総合的なコーディネートをやらせるとするのなら、具体的に言えばケースワークをそこがプロデュースしていく、コーディネートしていくわけですよ、さまざまなケースを。そしてさまざまな専門機関をつなげながら、そこで支援を総合化していく、あるいは継続化していくということになると思うんだけど、しかし、谷口さんのところはまれで、どうでしょう。全国で、そういう形で進んでいるところはあるのかな、と思いますが、いずれにしても、谷口さんのところの支援技法なり、あるいは介入の仕方が、どこでその科学性なり正当性が担保されるということはどのようにされているのでしょうか。

谷口：担保というところでいくならば、ひとつはやはり協働事業なんですよ。実は先ほどどういった形で支援情報が我々のところに集中してくるのか、あのパワーポイントを思い出していただきたいんですが、それは結果を共有する仕組みでもあります。協働事業ですから、ある意味委託者側と我々のパートナーシップのもとにおこなわれている。つまりはそこで同じケースを全部共有して

いるわけなんです。我々が支援してきたことが結果に出る、上手くいく、いかない、これを全部同じテーブルの上で見ているということですから、そこで客観的かつ多角的な検証が加えられていく、我々がやっていることがあっているのか、間違っているのかも現場で共有されるということなんです。そういった点で同じサポートステーション事業でも受託団体によっては関係機関との連携が不十分なところがあるのは、厚労省との契約のみでやっているところが多いのではないかと思います。連携先の機関からの委託事業であれば委託する側と実施する側の共同責任になってくるわけですから、そこである意味、平等な立場で支援と検証が行えるというのもある意味担保できる1つの方法だったのかなと思います。

山本：ちょっとよろしいですか。その辺りで疑問に思うことがありまして、いわゆる従来の支援機関がそんなに簡単にケース・事例を共有するものなのか、例えば秘密を明らかにするものなのかどうなのか、(共有)することに抵抗がなかったのか、ということですよ。例えば個人情報の開示が難しい、連絡をとっても非常に難しいというのが現状だと思います。それが非常にスムーズに行われている、その乗り越えるべき課題がどういう形で乗り越えられたのか、はじめから抵抗なくそれがおこなわれたのであればそれはルーツですよ。その辺りのことを教えていただきたい。

谷口：はい。これは、我々が10年かけて突破してきたものなのです。実は平成15年、我々が立ち上げた時には、まずは学校、というところからはじめました。なぜかというやはり不登校支援というところから活動が始まっているわけです。当時は学校の先生と連携をしましょうといってもやはり「NPOって何だよ」という段階から始まるわけなんです。個人情報の壁も当然出てくる。また、もともと連携には負担が伴いますから、学校側にとってはそれ以上のメリットがあるときようやく連携は成り立つもの、ですので、NPOと連携して何がプラスになるんだ、という学校側の反応だったわけです。実際、その壁を突破したのも結果です。先生方が支援してもうまく行かなかった不登校生徒がまさに立ち直って学校復帰をしていく、そういった過程を通じて現場での信

頼関係を徐々に構築することができました。次の段階としては、組織的な信頼関係を構築するために、こういったシンポジウムを開催する中で、必ず連携可能性が高い児童相談所や教育委員会等関係機関を招いた形で協議する場を作りました。そこで実際協議して出てきた課題を解決するために参加した市民の前で行動指針を示し提言的なものをする、それを次の年に必ず実行してまた同じシンポジウムでフィードバックして新たな課題に取り組む。これを平成15年からやり続けたんですね。となると、現場からの評価と、また組織的な評価というものが伴い始めて、平成18年になってから初めてIT活用支援事業、いわゆる不登校の子どもにパソコンでの授業と我々の訪問で学校の出席扱いにできる、こういった協働事業が生まれたわけです。つまりそこまでは3年間かかっている。もうひとつ個人情報の問題について補足しておきますが、学校現場で有効なのは集団守秘義務です。教職員同士やスクールカウンセラー等学校支援で配置されている人材の間では、生徒や保護者から得た情報を正式な同意書がなくてもある程度共有できている。なぜかというと、同じ学校職員としての集団守秘義務に当たるからです。実際、NPO職員である我々が何故、学校からある程度の情報をもらえるのかということ、県の教育委員会から委託を受けて、学校現場に入って支援をしていますから、つまりはそこでは大きなくくりとしての集団守秘義務の中である程度運用が許されるということなんです。

勿論、厚労省からの委託事業であるサポートステーションの肩書では同意書が求められるケースが増えてきます。しかしながら個人情報を伴わなくても現場の運用の仕方次第でリファーは出来るんです。実際に支援が可能かどうかわからない段階の協議に当然名前や住所等個人が特定される情報は必要ないわけですし、支援が可能となった段階でも関係機関に随行したり、電話の際も本人がいる目の前で今から代わりに説明しようか？という形で引継ぎをすれば、実は同意書なんて書かなくても、ある程度つなぐことも出来る、こういった現場の工夫でも少しずつ突破していくことも可能かと思います。

佐藤：もっと深めたいところですが、それぞれの地域の方もいるので本当いとうと出し合って、議論したいところですが、話題を次に行かせていただきまして、今、谷口さんのところの、その活動スタイルっていうのはソーシャルワー

ク的な形でケースを作りだしてそれを連携させていくという手法であり、そして連携という支援を総合化していく、コーディネートしていくというかたちでそれを全体化し、継続化していく、ということになると思うんですが、韓国のAkiiさんの取り組みは先ほどの南出さんの指摘のように、学校という従来の子ども・若者たちの育ちの場であり、ある種の普通を作りだしている、という教育的な場と距離を取りながら、もうひとつのコミュニティのなかでそれを相対化させていくような主体を作っていくという、方法。日本でも展開させてきた居場所の方法論にも通ずるものだと思うんですが、その谷口さんのような、今日本が支援を総合化し、連携化し、地域ベースでそれを作りだしていこうという手法に対して、ちょっと感想を聞いていただきたいのですが。

Akii：発表を聞きながら心が重くなりました。今韓国では谷口さんのような事業をやることはできません。なぜなら家族が自分たちの子どもを恥ずかしいと思うから助けを求めているんです。あと心理相談とか、精神科病院に行くケースも一部あるんですけども、個人情報保護のために情報を共有してくれないんですね。深刻なことはこういう話をするのは難しいけれど、また、その相談とか病院にいらっしゃる方々も、ニートやひきこもりが特別なケースだという認識をもっていない状況です。従来やってきたとか対人恐怖症にたいするやり方では解決できないと自分は思っています。残念ながら私たちは軽い、まだそのひきこもりやニートの青少年たちと接している状況です。そのため、もっと深刻な状況にあるひきこもりの青少年の人たちと会ったときに、谷口さんのように上手くやっていくことが出来るのか、心配なところもあります。まずはたくさん学びたいし、しかし心が重たいことばかりだと諦めたくなるかもしれないです。私たち自身もニートやフリーターのような性質を持っているから、しかし私たちは無重力青少年たちを助ける私たちの実践が、こわれた時計のようなものを、直せるようなものではないと思います。私たちが今やっていることは、新しい正常な社会にモデリングできるような働き人を見つけ出して訓練させているというように思っております。その働き人とは、新しい社会・世界を理解している支援者にあたり、あとは当事者の方々であるんじゃないかと思っています。

山本：韓国ではですねCYSシステムですか、いわゆる家出の青少年を守るといふ地域のシステムは非常に充実していますよね。家出をしてしまった少年が例えばホームレスになることを予防するために早期に介入するシステムは非常に充実していますよね。で、このシステムでは家族とはあまり関係なく保護できるわけですよね。ところがひきこもりの場合はどうしても家族から相談がない、家族が訴えることがない、家族が相談にくることがないために、ゆきだるま式に韓国では非常に増えてきているという現実はあるわけですよね。その雪だるま式に増えてきているという現実について少しお話いただけますか。

Akii：CYSを探して訪れる少年の場合は、無重力青少年たちより難しい状況にあるかもしれませんが、積極的に自分があるエネルギーをもって、解決しようというエネルギーを持っている人々なんですね。政府などから作られているセンターっていうのは、主に非行の青少年たちなので、そこでいわば無重力青少年たちと出会うことは難しい。なので私たちは自らをひきこもりを治癒する施設だという表現は使っていません。私たちは「音楽を教えているよ」と言葉で伝えるとともに、絵で青少年たちに分かるように私たちの実践を伝えていきます。またひきこもりに対する社会的認識が低い状況なので、いろんな難しい問題点があるため、雑誌に広告を出したこともあります。私たちのような貧乏な社会的企業としてはありえないことだったんですけど、そのように私たちは「カッコいいところだよ」、「ミュージシャンはカッコいい人だよ」という具合に肯定的にアピールすることによって、その青少年たちが積極的に訪れることができるようにしています。

佐藤：話を聞きながら感じたのですが、日本の若者支援というものの前身が不登校・ひきこもり支援、あるいはフリースクール運動に源流をもつ流れも非常に多いわけですよね。それが、2005年ぐらいから若者支援施策のプレイヤーとして進んでいく方向とフリースクール運動としてプログラムをより充実、維持していく部分と2つに分かれていった気がします。まさに2つに分かれている部分を、国を越えて聞いているような気がするのですが、私の問題意識はそれを統一しなければだめだというものです。だからどんどん若者の困難に寄り

添いながら社会につなげていくと言う取り組みと、彼ら自身がつながっていく主体となっていく取り組みと両方がないと本当の支援にならないだろうと思っているところなんです。そういったところで徐々に話をつなげながら進めていきたいのですが、質疑応答という時間になりましたので、質疑応答に行きながら最後までつなげていきたいと思います。

その前に質問用紙が来ていますので、フロアからの話をまた出してもらいながら進めていきたいと思います。では少し、つながりがなくなる部分もあるかも知れませんが、ここに Akii さんへの質問として、Akii さんの話の中に仕事らしくない仕事とか、ではその反対に仕事らしい仕事とは何か、普通と普通ではないとは何か、正常と正常でないとかを含めて、仕事ということを書いたときに、もう少し、詳しく具体的なイメージを出してほしいと思います。

Akii：私は社会学を勉強したのですが、恥ずかしながら、カール・マルクスについてはよく理解できていません。労働と言ったときに韓国では一定の場所で働くといったイメージが強いです。仕事と言うのは、私は家で掃除をすることも仕事だと思います。しかし、ここ 10 年で、労働と言う言葉が労働運動といったような強い意味を持つようになったので、最近では労働と言う言葉はあまり使われていません。その労働と言う言葉が仕事に変わって、会社で働くということが仕事と認識されつつあります。仕事らしい仕事と言うときに普通の人ビジネスをやったりすることが仕事というふうに、狭い認識をもつようになりました。しかし私は個人が相互にコミュニケーション、相互作用すること全部が仕事だと思っています。なぜかという、それは、いいことであれ、悪いことであれ、ある形の価値を生み出しているからです。しかしこの社会では価値のあることと価値のないことのカテゴリーを作って、価値があることにはお金を出して、価値のないことにはお金を出していません。そして私はこのカテゴリー自体が変わらない限り、社会が続けて充足していくことはないと思います。だから例えば色々な種類のボランティアなどもある程度の対価は払うべきだと思いますし、社会のあちこちで仕事らしくない仕事とうまく活発に働かないと経済システム自体が上手くいかないような状況になっているのではないかと思います。もう 1 つは人が働くと言うのは義務であると同時に権利であると思いま

す。なぜかという人は1人では生きていけないからです。ニートやひきこもりの方は仕事をしなければならないのではなくて、仕事をする権利があるのだと思います。だからその人たちのできる、仕事らしくない仕事を仕事としてつづることが大事になってくると思います。

佐藤：では少し、仕事に就けない若者たちと言うときに、2つの意味合いがそこにはあって、対人不安とか仕事に向かっていくエネルギーを喪失して、身体が社会化していったいないそういう若者をどう仕事へとつなげていくのかという支援のあり方があります。もう1つ階層性の問題を出されている方がいて、一方で低階層、生活保護世帯を含めた貧困家庭で育ったひきこもりの青年と、今回のふつうの問題と階層性の問題。われわれがずっと議論してきた対象になるような若者と、貧困あるいはホームレス、あるいは派遣切りによって漂流する若者たちとひきこもり問題は重なるのか、重ならないのか、支援のありようは一緒なのか、違うのか、その辺を少し、どのようにやってくる若者をその波形系にある階層性の問題をどのように捉えられているのか、お三方どの方でも結構です。

南出：最初の問題状況のところ、若年ホームレスの問題とひきこもりの問題とで、かなり支援の手法が似通っているというところを触れながらも、中身の話は全然しないままだったので、補足しておきます。社会保障を申請していくとか、ホームレス支援というと、いわゆる生活支援、生きていく場所を確保することが入り口になってきます。明日食べるご飯や寝る場所、これはかなり物質的な意味での貧困問題になりますが、では家や食事を提供すればそれで済むという話ではありません。ヘルプの声をまず出せるという時点である程度生きようという気力が持っている証なのですが、ホームレスの状態になってもヘルプの声すら出せないような状況の人たちもいるし、そういう人たちにどう支援していくかという、強引に何かするのではなくて何度も足を運んで顔を合わせて、だんだん関係を作っていくなかで物質的な支援も可能になっていくのです。つまり、信頼関係の回復ということと物質的支援というものは不可分になっていて、どちらかだけでは立ち行かない。ひきこもり支援の方でも、いくら安

心して信頼関係が出来たとしても、実際に生活する場所や、通う場所など、そういうものがないことには先に進めない状況があり、その両面性はかなり共通していると思います。

そして階層性の問題について、Akiiさんの「無重力青少年」という、マイナス面と可能性との両面を合わせた言い方はかなり面白いなと思いました。これを日本語で言うとはかかずっと考えていたのですが、競争社会からはじかれているけれども、そこから自由でいられるという意味で“ノンエリート”という言葉がちょっと近いと思いました。いわゆるノンエリートというときにまさに階層問題で、低階層、搾取される人たちというマイナスの位置づけはありますが、他方で競争原理からエリートを目指すという上昇志向から外れることが可能になっている側面もあります。それは「外されている」とも言えるのですが、新しい上昇志向じゃない社会を創っていく主体にもなっていけるのではないかと、ちょっと理想的かもしれませんが、そのように思いました。

佐藤：どう捉えたらいいのか。Akiiさんのところのスペースに来ている若者たちのことについて、階層性の問題をどう捉えているのか。日本ではひきこもり問題は最初むしろ中層以上の豊かな社会の子どもたちの問題として捉えられ、ここに来て貧困問題がかぶってきていて、より若者を捉えるイメージが拡散していてそれが同じなのか、一緒なのか議論していかなければいけない状況になっているのですが、韓国ではその辺の状況はどうなっていますか。

Akii：韓国の場合は、はじまったばかりなので中層の子どもたちが多いです。私たち Yooja Salon の場合は、プライベートで寄付してくれる団体²⁵があるので、貧困の子どもたちも無料で通えるようにしています。両方あるということですね。今、現状においては貧困の子どもたちが少ないから、両方が影響がないというか、それに影響はないという状況です。しかし、短期的には2つの層が混じっていることはあまりいいことではないと思います。しかし、長期的にみてもみると、韓国の中産層がなくなるような感じですね。日本においても下流

²⁵ 前出「ソテジマニア・ギビングサークル」

社会という言葉があると聞いていますが、それと同じような状況だと思います。しかし、落ちているといった具合に感じているので、中産層の家庭の子どもたちも自分たちが貧困の家庭だと認識している子どもが多いみたいです。反対に貧困で貧しい子どもたちは、国からの支援が昔に比べると増えてきたので、よくなっていると考えます。原論的な話になると思いますが、2つの階層を別々に考えることも大事ですし、全体的な社会の問題として一緒に考えることも大事ではないかと思います。

佐藤：では、谷口さんのほうから10年間ずっとやってきて、最初不登校に対する訪問支援からはじめられてきた事業の中で、この間の佐賀の取り組み、全体的な利用者も多岐にわたり始めていると思いますが、この間の社会階層の子ども、若者の受け入れもはじまって、支援の方法は変わらないですかね。

谷口：はい、我々が継続的に実施している被支援困難者の調査によれば、今のところ大きな違いはないと思います。この指標は何かというと、虐待家庭も含め、実際支援が必要なのに主に経済的な事由で支援が受けられない子ども・若者についての調査なんです。例年アウトリーチ対象者では、34%、35%近くなのですが、逆にいくと残り7割近くはそうではないというわけですから、となると、階層というかたちの考え方は現段階では判断できません。むしろ調査では多様な、複合的な問題を抱えているケースが多数を占めることから、現場では多面的なアプローチが求められますし、社会的な観点では問題に対して近視眼的にならず従来の枠組を超える形でクリエイティブに考える必要があると思います。

特にそれを思うのは、就労、就職というときになった時に、どうしてもグローバル経済が悪い、競争社会が悪いという話になってくるんですが、本来であれば、資本主義という観点でいくと、全体としては富がより拡大し、より多くの人が幸せになっていくという基本的な考えもあると思うんですね。しかし、それは若者のためにならないということで日本が辞めようと経済構造を変えようとしても、世界がその考えに乗っている間は、日本経済は沈没していくわけですから、支援現場の我々としては、刻々と苦しみが増える当事者のことを考え

るとそういった議論に問題解決の方向性は見いだせない。勿論、長期的な視点で変えていく必要はあると思うんですが。今、我々が現場で言えることは、さきほど Akii さんの話にもあったように、まずこういった若者たちが何を考えているのか、その価値観にチャンネルを合わせて関係性をつくっていく、これが大事だと思うんですね。次の段階としては、そういった人とのつながり、社会とのつながりを回復しながら、その価値観に合わせつつも修正を行い、現実的な職につながるように支援していく。次の段階として出てくるのが、まさに今、Akii さんがやっているようなクリエイティブな仕事になってくると思うんですね。我々も実は、文科省から事業を引っ張ってきて、実はネットパトロールという事業を立ち上げたんです。どういうことかということ、学校裏サイトでは多くの子どもたちがとんでもないじめに遭っている。そういった誹謗中傷を検索して、削除依頼を出したり、関係機関の支援につなげたり、そういう作業をひきこもりの若者たちにやってもらいました。その他、地方のある地域では「出不足代」という慣習的な仕組みがあります。例えば地域の住民で掃除をしたり、草刈をしたり、公益の作業に対して、来れない人は出不足代として自治会にお金を支払い、そのお金を頑張った多くの人たちで分けるという制度がありました。しかしながら今では高齢化の進行や地域社会の崩壊で、お金だけ払う人が増え、実行する人が不足して制度が成り立っていない状況も散見されます。だったらそこに若者の中間的な就労の場を求めることもアリだと思います。別の観点から見れば、若者が地域社会の新たな「つなぎ役」として参画することにもつながります。

佐藤：そういう形で困難複合的な困難の背景に、貧困の問題、あるいは庇護者の高齢化、これは若者の困難を双極化していく、二分化していく背景の問題としてあると思います。立ち上がれない、家庭的な支援を受けられない若者と、家庭がかるうじて維持する層とが分かれていくという問題がありますね。その辺が改めて生まれてきている状況だと思います。ただ、貧困の問題、経済的な貧困だけでなく、経済的な貧困の若者が精神的な貧困、意欲の貧困と呼ばれているのですが、そういう状況に陥ってくると、あらわれ方としては、従来のひきこもりの現れ方とずいぶん似てきているし、支援のメニューもかなり似てく

るということになってくるのではないかなと思います。これだけやっていると時間がかかってしまうので、話を最終的な方向へもっていきたいのですが、南出さんのほうから少し、青年の自立支援の課題ということですが、実は自立とはなんなのかということも含めてですね、こないだのところでも何か話をした気もするんですが、少し3人のほうから話を出してもらいながらですね、徐々に話をまとめていきたいと思うんですが、その辺はきわめて抽象的な話ですね。もう少し具体的に触れていただけますか、南出さん。

南出：今後の具体的な課題ということですか。

山本：ちょっといいですか、その課題との関わりでね、例えば発達という観点とね、いわゆる自立との関わりですよね。それがどういうふうに議論されているのか、あるいは議論されていくべきなのかというですね、そういう質問も来ているんですね、ある意味で若者が、1人の人間として発達していく中で、自立をどうとらえていくのか、あるいは社会の主体者としてどう育っていくのかということも含めてですね、少しお話していただければと思います。

南出：“自立とは何か”をダイレクトに問うても、結局のところ“個々人によって違う”という話に落ち着いてしまうのではないかという危惧もあるので、自分が重視したいのは“自立を支える社会的条件とは何か”という問いです。その観点からの派生として、発達の支援のあり方にかかわる問題として、Akiさんが指摘された“労働”と“仕事”というものの違いが重要になると思います。いわゆる賃労働のような“労働”は分かりやすいですが、じゃあ後者の仕事というものに含まれている中身って何だという問いが出てくる。ひとつの仕事っていうのはお金を稼ぐという生活の基盤でもあったりするのですが、それ以外にも、何かやってみてできた喜びだとか、失敗して何か悔しい想いとか、そういうのを味わったりすることもそこには少なからず含まれている。こういうのは結局、大人とか20歳越えていたら“仕事”と言われがちだが、これは“遊び”のなかにもそういう要素があるし、これを全部ひっくくめて、教育の視点から捉えていくことが重要なんじゃないか、それが“発達支援”を展開してい

く上でキーになるのではないかと考えています。ただ、これは数値的な評価や現代的な行政評価にはのりづらいところがあります。ここを無理に数値化するのではなく、でも実態に即したカタチに乗せ社会に伝え提起していけるような手法を編み出していかないといけないと思います。これは誰よりも自分含めた研究者の課題だと思いますが、現場に根差した研究蓄積、これができる母体をつくっていくことが必要であるということが、全体としては一番強く思っているところです。あと、支援の主体・担い手は若者自身だという視点も大事になります。「若者に何かしてあげる」のではなく、若者が生きていける場所を当事者と一緒になってつくって行って、その中で若者自身が自分なりの課題を見出して行って、そこから学んでいくという方向性が必要だと思います。

佐藤:あの、こういう質問がきていますが、ケアワーク、ソーシャルワーク、ユースワーク概念が類型化されていますけども、それをもう少し具体的に現状の支援のありようと、それからこれから追及していくべき、支援の多様化というのもあると思いますが、ちょっと説明してもらえますか？

南出:これは、同じひとつの実践の中でも起きていることなので、わざわざ分けて書くことが、むしろ弊害も呼びかねないので危ういですけど、そのことをまずはご了解いただければと思います。

1点目のケアワークについて、「ケア」という言葉が、実情としてはかなり狭く用いられていますが、最初に Akii さんが言っていたような、「他者がいるから自分というのを見出せる」とか、周りとの関係の中で、自分が自分でいられるということを取り戻していく過程、といった意味合いです。ちょっと抽象的ですが、人に頼っていいとか、安心して自分をゆだねられる、ここにおいていいんだという関係性をつくっていく、これがケアワークの核心です。最初は1対1の個別支援になりがちですが、安心・信頼の幅をだんだんより広い領域に拡げていくことが支援の過程になります。スタッフとの信頼関係ができれば、だんだんそのうちスタッフは引いて行って、仲間や場への信頼に移って行って、さらには外の世界への信頼も回復し飛び出していける、といったイメージです。

2点目のソーシャルワークというのは、具体的にもうちょい問題を解決して

いくこと。問題ってものすごく多様化していて、なかなか一筋縄ではいきませんが、谷口さんが出てくれた支援の様子は、まさにソーシャルワーク的な側面を見事に描いているように思います。分かりやすいところでは、社会保障や各種資源の活用が該当するのですが、たとえばひきこもりの若者に対し、居場所をつくるという活動もまた、ソーシャルワークの重要な課題になります。表面的には「家があるからいいよね」って言われがちですが、そこには「家しかない」ということの重さというのが陰に潜んでいたりする。その問題を掴んで解決に向かっていくというのがソーシャルワークです。

そして3点目のユースワークは“それ以外の場所”、この Yooja Salon のかぼちゃの絵みたいなどころで行なわれていることが該当するのではないかと思います。ちょっとこれは谷口さんに聞いてみたいのですが、たとえば2番だけが全面化してしまうと、支援者も疲弊するというか、本人もかなりきつい状況にあって、丁寧にやろうとすればするほど、スタッフも疲れていくということが起きてしまうんじゃないか。そこで重要なのが、「fun! fun! fun!」っていう視点だと思って。“支援する”だけでなく、一緒に楽しいこと、新しいことをつくっていくという楽しさ、これが“活動”という3番目のところで決定的に重要になってくるのではないかと思います。

谷口：そうですね、今日は時間の都合上、先ほどフローチャートの中には入れていませんでしたが、実際の支援の導入段階では、本人が持っている価値観に合わせたプログラムをつくっていくというのが重要な要素になるんです。本人も興味・関心を抱ける内容からチャンネルを合わせていかないと、支援しますよって入っていったところで拒絶されるだけだったりします。そういったところでは共通していると思います。若者支援分野全般に共通して求められることだと思いますが、基本的な若者理解、若者の文化や多様化した価値観といったものは、やはり支援に携わる人間は皆が知っておかないと偏った支援になっていくリスクが高い。勿論、支援者は多様であっていいと思うんですが、最低限、支援に必要な土台となる部分の知識、共通する部分に関しては、少なくとも社会的なコンセンサスを得なければならない段階にきているんだろうと思います。それがなかったら、結局いつまでも机上の空論で、議論がかみ合わない、

ああではない、こうではないという話で、現場の子どもたち、若者が不利益を被るのではないかと危惧しています。

佐藤：時間はおしてきているのですが、その「fun!fun!fun!」という一緒に楽しさ面白さを作り出していく営みのなかに仕事がちち上がっていきだろうし、そして“ふつう”の適応から創造的な適応と言っているのでしょうか。そうした学び手の新しい成長を支えることが出来るということで、おそらく韓国の、先ほどから出て来ている社会的企業というイメージは、私たちが日本で考えているイメージとだいぶ様相が違っていて、音楽の、素人の音楽集団がどうして仕事になるのかということを含めて実に多様な、取り組みをやられているんですが、そもそも韓国でイメージしている社会的企業、そしてそれを、若者に自由に創り上げさせていく、その意図的なバックアップはどうなっているか。若干この間から社会的企業という言葉聞きながらどういう内容だと思われる方もあるので、Akiiさん、最後の講演として少し触れていただけますか。

Akii：難しいです。最後に社会的企業について話したいと思います。短くきっていきたくと思いますが、自立とは相互依助と相互責任だと思います。また、創業を支援していますが、私たちは創業を支援しているとは思わないで、職業の“職”ですね、仕事を立ち上げることを支援していると思っています。今は、You Tubeに面白い動画をアップしたことだけでもお金を儲けることが出来る時代です。だから社会的な仕事、福祉的な仕事というときに、壊れた何かを修理するイメージが強いと思いますけど、もっと一般的な人の興味を引き出すためにも面白いこと楽しいこと、そのような仕事を作り出すことが大事だと思います。先ほど大人になっていく、発達を支援すると話しましたが、私は大人ってというのはなにか、その定義を考え直す機会があればいいな、と思いました。Yooja Salonにいる悠々自適な青少年たちはまだ20歳にもなっていないのですが、一般的に社会で活動している大人よりもっと大人らしいときもあります。自分たちが困難にあるときに、なんらかの形でそれを表現することができますし、また他の人が大変なときに助けることもできる。それは相互依助と責任という面においては、各国の一般の大人よりもいいところではないかと思っています。

政策においては、Haja センター自体を一時的な自立空間と呼ぶのですが、そのような空間をこれからどんどん作り出す必要があるのではないかと思います。ここに関わってくる政策とは、ダムやビルを作る政策とは違うと思います。社会的な企業、社会的企業の政策について話したいと思いますが、事実、韓国の社会的企業の政策がたくさんの可能性を持っているとは思いますが、今までは政策自体が福祉あるいは仕事を創り出すことの代わりだと認識されていました。政策自体が悪いという意味ではなくて、社会的企業、政策自体が、いま私たちがこの場で議論している新しい仕事を創り出す、そのようなことに関わってくる第2段階、次のステップへと行っている最中だと思います。事実私たちは、日本にたくさんのコミュニティビジネスから中身を作るためのたくさんのアイデアをもらっている状況でもあります。

山本：ありがとうございます。そろそろまとめの時間ですが、韓国から一緒にいらっしゃった Ko さん、この Akii さんのシンポジウムをとおして、Ko さんが感じたことを少し手短かに報告してください。

Ko：韓国では、ひきこもりを支援する団体は私たちがはじめてとしています。韓国もいずれ10年、20年過ぎれば、このようなシンポジウムが開かれると思うと、やはりところが重く感じています。私はこういった問題に関しては本当に初心者なので、みなさんのような専門家の前でこういった意見を述べるのはとても恥ずかしいことではありますけれど、私は、Yooja Salon に訪れてくる子どもたちひとりひとりを、支援を必要とする対象者とみなすのではなく、自分の人生に関わってくる1人の、ひとつの縁だと考えています。教育機関というには非効率的なのは、1人の対象者に6人のスタッフがついているからです。でもそもそも友だちとかを作るときに効率とかを考えるわけじゃないし、友だちになるためにはお酒を飲んだり楽しんだりして時間を無駄にすることも必要だと思っています。なので、これから先も非効率的な支援の仕方を続けたいと思っています。ありがとうございます。

山本：ありがとうございました。ここで、コーディネーターの佐藤先生に少し

まとめを行っていただきたいのですが、お願いしているのはですね、いわゆる政策提言を含めて今回のディスカッションをどうまとめていただくのかということで、お願いしています。非常にたくさん話題が出てくるなかでのまとめにくい状況だと思いますが、よろしくお願いします。

佐藤：まとめるほどの資料も整っていませんし、成熟もしていませんので、感想を超えることはできないのですが、やはり、ひきこもりの青年、あるいは支援機関に救いを求めて、支援を求めてやってくる当事者の若者たちをめぐる、ふたつの戦いがいつも存在していると思います。いわゆる適応を迫る支援と、彼らのニーズに基づいた彼らの自立や、本来の意味の自立の空間を創りながら、彼ら自身が楽しく、誇りを回復しながら社会へと参加していく支援の有り様ってというのは、同じように見えてかなり拮抗関係を現場では持ちながら進んでいると思います。そういう意味では、絶えず支援とは何なのか、若者の自立とは何なのか、問い直しながら支援の現場は支援のプログラムを作っていく必要があると思います。ユニークな参加とは何なのかということになりますと、まだまだ議論がつくされておられませんし、そもそも参加をする社会、包摂する社会とはなんなのかという議論がほとんど置いといて、参加だ、包摂だと語っていると思うんですね。そもそも包摂したり、参加したりする社会があるのかないのか、そのことが問われはじめているのではないか。あるいは若者たちの立ちすくみ、立ち止まりのなかにはそうした暗黙のですね、問いが内包されているのではないか、という風に思うんですね。そうした問いそのものを言語化し、そして共有化していくこと抜きにして支援ということはありません。そして、そのときに、支援を構築する言葉っていうものをカウンセリングを含めて、共通言語を我々はまだまだ支援者側で持ち合わせていない、それぞれの立場から支援を語り、支援を語る間はいいのだけれど、それぞれの支援で事をなしているという現実があるのではないか。それを乗り越えていかなかったら到底若者たちが社会のなかで共通の時代を生きる同時代の仲間として立ち上がっていく支援はできないだろうと思います。なるべく支援者が統一した言語で支援の地平を切り開いていないわけですから、支援される若者たちがそこから共通の勇気と希望を与えられるという支援は成り立たないだろう

うと思います。そういう意味で、そろそろ、いろんなところから、支援とは何か、あるいは支援をするもの同士の共同研究の機会をつくらなくちゃいけないという話が出ております。そういう意味では、そろそろそういう形に成熟してきたのかなと思っています。今日お話しになった谷口さんの佐賀での実践はこの10年にわたってものすごい積極的な、献身的な、取り組みが行われてきているものと思います。私もその流れに参加して生きている者として、本当に工夫をしながら現実の若者たちと取り組みを進め、そこから学ばれ、それを理論化する研究者もこの10年間ものすごい日本中に広がってきております。ここで改めて、そしてそこに行政が現場から学ぶ、これは民間に委託をした形で文字通りはじまった若者支援ですので、現場から学ぶ以外に政策を創ることができなかったんですね。この間。そういう意味で政策側も一緒になって改めて日本における若者支援とは何かっていうことを理論化し政策化する時代がやってきていると思います。もちろん谷口さんらはそれを、その政策のなかに、主導的な役割を担っていくことになるだろうと思います。そういう形がようやくここにきて生まれつつあるということです。普通をめぐる、あるいは自立をめぐると言ってよいかもしれませんが、ふたつのネットワーク、技術を支えるためのネットワークを創るということと、それから、当事者を含めた、ともに“ふつう”を創るネットワーク、ともに参加すべき、参加するに値する社会を作り出していくネットワーク、これも創っていかなくちゃいけない。ネットワークと言っていますが、やはりふたつのネットワークがある。支えるための、支援者側のネットワークと、そして当事者も含めた働きがいのある、あるいは生きがいのある、そういう“ふつう”を、自分らの新たな生き方を、普通を超える生き方を、創り出していくネットワークも、これからおそらく支援が運動的な要素も、機能も持たないと、若者たちが本当の意味で未来に希望を持ち出して、元気に歩き出すことは出来ないと思います。そうすることなくして現状は困難。時代の転換点。グローバル化し、産業構造も変わってくる。そういう若者の自立を、世界共通するテーマでもありますので、そのなかでそれを切り開いていくってというのは、誰かがその状況をつくっていくことじゃなくて、彼ら自身が、そういう主体として時代の形成者として立ち上がっていかない限り無理だろうと思います。私たちもそうした営みで、ぜひ一緒になって進んでいきたい。そ

ういう形から出てくる支援論とは、精緻に作り上げていく、そして共通言語として日本中全体の、取り組みのなかにそれを広げていく、そういう時期にきているのだらうと思っています。この韓国の Akii さんにも来てもらって、非常に純粋な気持ちに、若者が若者になるというのはどういうことなのかと、そして若者と一緒に生きるとはどういうことなのかというのを、もう1度思い起こさせていただいたという意味で、非常にいい機会を提供していただいた。そして、それと同時に、フリースクール運動のなかから、新しい働き方という形で、一気に韓国の場合は、そういうイメージを運動のなかに出されて来ている。日本は働き方の問題はですね、長い長いひきこもりや不登校運動のなかでいま、ようやく定番になりつつあると思います。そういう意味では、先進的な韓国のラディカルな運動というんでしょうかね。そこから学んでいく視点がいっぱいあると思います。そういう意味で両国の、支援者同士、あるいは当事者の若者同士が、お互いに学びあいながら、国を超えて新しい混乱のいまの時代を、世界的な混乱期の時代を乗り越えていく主体がひきこもり、あるいはニートと呼ばれるような形で足踏みをしている若者たちの潜在的な可能性がそこで開花されながら、連帯し、参加してってもらいたいと思います。総体がおそらくユニークな生き方、働き方ということであって、なんかかわったことすることがユニークじゃないだらうと思います。そして、私たちは適応化、退行化を超えて、ユニークな参加、あるいはユニークな社会を自分たちの社会を創り出していく。“創造的な適応”と最初山本先生がおっしゃっていたのですが、そういう言葉で言えるかどうかわかりませんが、そういう流れのなかに当事者も支援者も参入していきたいと思っています。ちょっと長いディスカッションの果てにまとまりになっていませんが、私の抽象的なメッセージで終わりになるようですが、是非今後ともこういうセッションを続けながら、夢をもって一緒にやっていきたいと思っています。ありがとうございました。

山本：ありがとうございました。これでですね、公開シンポジウムを終わらせていただきますが、まだ1970年代当時の元気だった青年団活動、あるいは子ども会活動、そのころの思い出が私のなかから消えないんですね。あの頃に、本当にこう、地域で子どもたちが、若者たちが生き生きと活動していた、あの

良さを生かしながら地域づくりをどうしていくのか、若者たちが地域で主体的にどう生きていくのかということが非常に今回私は Yooja Salon の実践の話聞きながら痛感していたことです。さらに、こういうシンポジウムが何らかの形でまた開催したいと思います。本当にシンポジストのみなさんありがとうございました。韓国からシンポジウムのためにわざわざ来ていただきました、Akii さん、Ko さん、本当にありがとうございました。終わらせていただきます。